大学生を対象とした高齢者介護についての意識調査

大森　　直

（川畑　隆ゼミ）

筆者には認知症の祖父がいた。罹患したきっかけは，筆者が小学６年時に祖母が亡くなったことである。その頃から祖父の行動がおかしくなり始めた。初めのうち，それは祖母の死によるショックからだと思っていた。それでも行動の変化はまだそれほどでもなかったから，家族全員が時がたてばまたもとに戻るものと考えていた。しかし，祖父の行動はどんどんおかしくなっていった。

筆者はその当時，認知症という病気を知らなかったので，祖父の行動を理解することができなかった。変化が起こりはじめて何年かたったときに，両親が「認知症なのではないか」と話しているのを聞き，その病気の存在を知った。しかし，いくら病気といっても祖父の行動はひどすぎた。当時の私の常識をはずれていた。たとえば，ご飯を食べたのに「ご飯はまだか」と言ってきた。このようなことが毎日のように繰り返されるのを見ていると，病気だとは知っていても，これはもともとの性格の顕れなのではないかと思うようになった。筆者のなかでは苛立ちだけが募っていった。祖父に対する態度も日々悪化した。そして，筆者だけでなく家族全員が祖父に対してどのように対応すればよいかわからなくなっていった。そして，主治医のアドバイスでデイサービスを利用し，少しでも病気の進行を遅らせるようにしたり，祖父が快適に過ごせるような配慮を重ねた。しかし，結局，家族だけでは荷が重くなり介護施設に預けた。その翌年に祖父は亡くなった。

筆者の両親は共働きだったので，限られた時間のなかで祖父の面倒を見なければならなかった。筆者もできる限りの手伝いはしたが，子どもにできることは限られていた。時がたつにつれて両親の負担は大きくなっていった。筆者が高校生になった頃に，祖父はトイレに行くまで排尿を我慢できず途中で漏らしてしまうようになった。垂れ流しのまま歩くので，家の床のいたるところに水溜りができた。この始末が介護の中身に加わった。初めのうちは1週間に２，３回のペースだったのが，そのうち毎日やらなければならなくなった。日に日に弱っていく祖父を見るのも辛かったが，それ以上に両親の疲労が目に見えて蓄積していくことが辛かった。

筆者は24歳になった。そして心理学を勉強してきたことによって，祖父のことを少しずつ理解することができるようになった。しかし，理解すればするほど，筆者も含めた家族の対応が適切でなかったことを思った。認知症の予防ということなど頭になかった。症状への対応には戸惑うばかりだった。しかし，何よりも祖父に幸せな晩年，最期を送らせてあげることができなかったのがとても心残りであった。それから筆者は，どんな対応ができていれば，祖父と家族全員が満足な気持ちで最期を迎えることができたのだろうかと考えるようになった。

筆者は介護に関心を強く抱いている。介護について勉強しながら介護の今後について考えるようになった。介護の内容に進歩はみられても，日々発展する医学にもとづいた医療のように劇的な変化が起こる可能性はそう高くないように思われる。介護が必要になるような病気の予防策や治療法は革新されても，病気になって介護される人の全人格に向けた介護については，現在も将来もやるべきことの基本は変わらないのではないだろうか。介護を進歩させるのは人の介護に対する意識である。国民全体の介護意識の高まりが介護の進歩を後押しするのだと思われる。

目　　的

本研究は，よりよい介護のありかたを探ることを目ざす筆者の今後の研究のための予備調査と位

置づけたいが，大学生の介護への意識について，そのおおまかな傾向を調べることを目的としている。

方　法

調査対象者：京都学園大学の学生103名（男性57名，女性46名）で，平均年齢20.8歳であった。

手続き：この調査は，高齢者の介護に関する５項目の質問，すなわち，①もし自分が介護することになったら嫌だと思うか，②介護をしている人は立派だと思うか，③将来，身内の誰かに介護が必要な状態になった時のために，介護の知識を学ぶ必要があると思うか，④自分や家族が将来高齢者になり介護が必要な状態になることに，不安を感じているか，⑤自分が高齢者になり介護が必要な状態になった場合は，在宅介護を希望するか，からなり，それぞれについて「非常に思う（感じる)」，「思う（感じる)」，「思わない（感じない)」，「まったく思わない（感じない)」の４項目のどれかを選択し回答してもらった。また，そのそれぞれについて，どうしてそう思った(感じた）のかを記述してもらった。

なお，この質問項目の作成にあたっては，藤田昇治・高嶋一敏・佐藤三三（1999）を参考にした。

今回の調査では，上記の項目の他に実際の介護経験等についての質問も行なったが，その回答について本論文では分析するまでには至らなかった。調査対象者にお詫びし，今後において分析を進めたい。

結　果

質問１.「もし，自分が介護することになったら嫌だと思うか」

図１が示すように，「非常に思う」７人（男５人，女２人)，「思う」43人（男23人，女20人)，「思わない」48人（男26人，女22人)，「まったく思わない」５人（男３人，女２人）となった。「非常に思う」と「思う」を足すと50人，「思わない」と「まったく思わない」を足すと53人となり，介護が嫌だと回答した人と嫌ではないと回答した人の数にそれほどの差は見られなかった。男女別に見てもその傾向は同様であった。

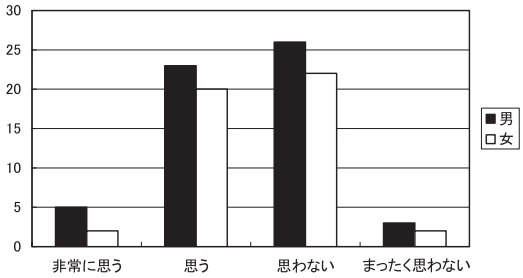

図１　「もし、自分が介護することになったら嫌だと思うか」に対する回答数

介護が嫌である理由は，図２のように，「自分の時間がなくなるから」38%（18人)，「大変そうだから」28%（13人)，「汚物等の処理をしなくてはいけないから」15%（７人)，「無回答」９%（４人)，「その他」11%（５人）となった。「その他」の内訳は，「自分の親はいいが，他人を介護するのは嫌だから」３人，「家族が弱っていくところを見るのがつらいから」２人であった。

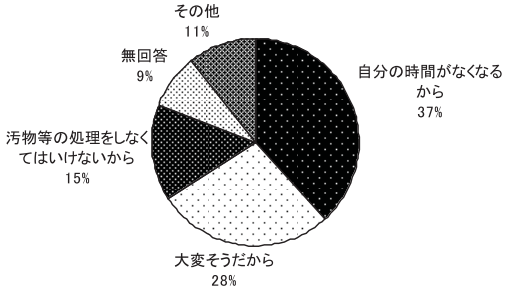

図２　介護をするのが嫌な人のその理由

質問２.「介護をしている人は，立派だと思うか」

図３が示すように，「非常に思う」54人（男29人，女25人)，「思う」37人（男17人，女20人)，「思わない」11人（男10人，女１人)，「まったく思わない」１人（男１人，女０人）となった。「非常に思う」の回答が最多であり，「非常に思う」と「思う」を足すと全体の88%を占めたことから，かなりの人が介護をしている人は立派であると思っていると言える。男性と女性で比較すると，女性は1人を除いて「非常に思う」，「思う」を選択し，男性の結果とは異なった。

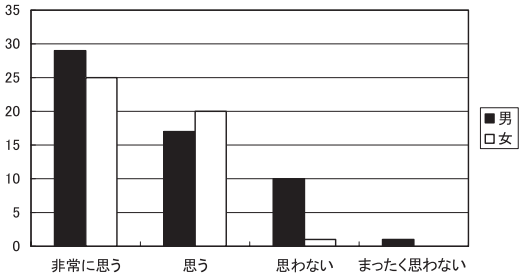

図３「介護をしている人は、立派だと思うか」に対する回答数

介護をしている人を立派であると思う理由は，図４のように，「介護をしているという行為自体」39%（35人），「自分を犠牲にしているところ」26%（23人），「無回答」17%（15人），「自分が嫌だと思うことをしているところ」16%（14人），「無償でしているところ」２%（２人）であった。

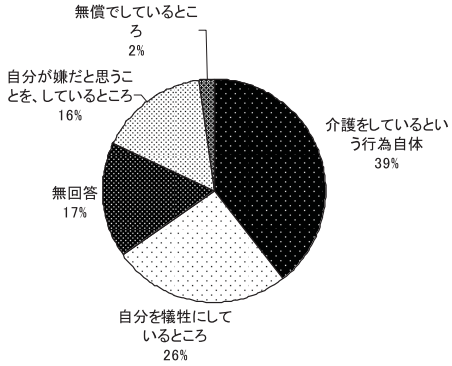

図４　介護をしている人が立派だと思う理由

介護をしている人を立派であると思わない理由は，図５のように，「介護をすることは当然だから」59%（７人），「無回答」33%（４人），「自己満足だと思うから」８%（１人）であった。

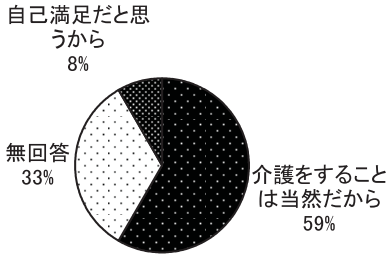

図５　介護をしている人を立派であると思わない理由

質問３．「将来，身内の誰かが介護が必要な状態になった時のために，介護の知識を学ぶ必要があると思うか」

図６が示すように，「非常に思う」28人（男15人，女13人），「思う」63人（男36人，女27人），「思わない」10人（男５人，女５人），「まったく思わない」１人（男１人，女０人）となった。「思う」が一番多く，「非常に思う」と「思う」を足すと全体の88%を占めたことから，かなりの人が介護の知識を学ぶ必要があると思っていると言える。男女別に見てもこの傾向は変わらなかった。

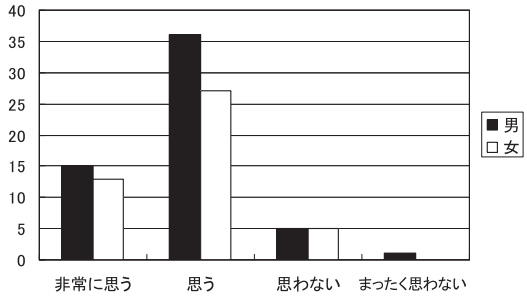

図６　「将来、身内の誰かが介護が必要な状態になった時のために、介護の知識を学ぶ必要があると思うか」に対する回答数

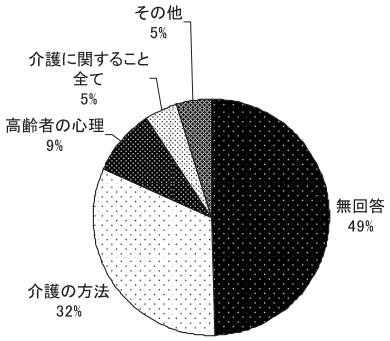

図７　介護について学ばなければならないと考えることがら

どういう点を学ぶ必要があると思っているかについては，図７のように，「無回答」49%（43人），「介護の方法」32%（28人），「高齢者の心理」９%（８人），「介護に関することすべて」５%（４人），「その他」５%（５人）となった。「その他」の内訳は，「病気の知識」２人，「緊急時の対処法」１人，「介護に関する法律や制度」１人，「介護施

設の概要」１人であった。「無回答」が49%と全体の半分を占めていることから，介護に関する知識を学ぶ必要はあると思うが，具体的に何を学べばよいかはわからない人がかなりいると言えるかもしれない。

質問４．「自分や家族が将来高齢者になり介護が必要な状態になることに，不安を感じているか」

図８が示すように，「非常に感じる」17人（男９人，女８人），「感じる」61人（男32人，女29人），「感じない」19人（男11人，女８人），「まったく感じない」６人（男５人，女１人）となった。「感じる」が一番多く見られ，「非常に感じる」と「感じる」を足すと全体の76%を占めたことから，かなりの人が，自分や家族が将来高齢者になり介護が必要な状態になることに不安を感じていると考えられる。男女別に見ても，この傾向は変わらなかった。

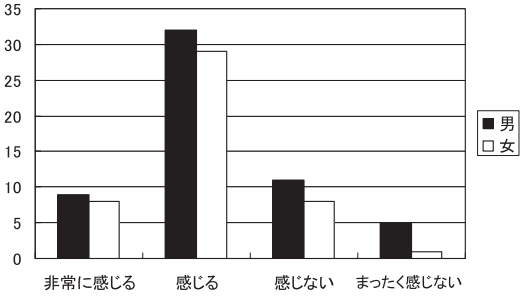

図８　「自分や家族が将来高齢者になり介護が必要な状態になることに、不安を感じているか」に対する回答数

自分や家族が将来高齢者になり介護が必要な状態になることに不安を感じる理由は，図９のように，「無回答」31%（23人），「どうしたらよいか，わからないから」20%（15人），「家族に負担がかかるから」18%（13人），「体力的に不安だから」８%（６人），「介護が大変そうだから」７%（５人），「想像ができないから」５%（４人），「その他」11%（８人）であった。「その他」の内訳は，「親が心配だから」１人，「家族が崩壊すると思うから」１人，「自分が嫌なことを人にさせることに気が引けるから」１人，「将来に期待ができないから」１人，「身内の性格に不安があるから」１人，「協力してくれる人がいるかが不安だから」１人，「金銭面に不安を感じるから」１人，「長男だから」１人であった。「無回答」が一番多く，二番目の「どうしたらよいか，わからないから」と合わせると半数となることから，将来について漠然と不安を覚える人がかなりいることが推測される。

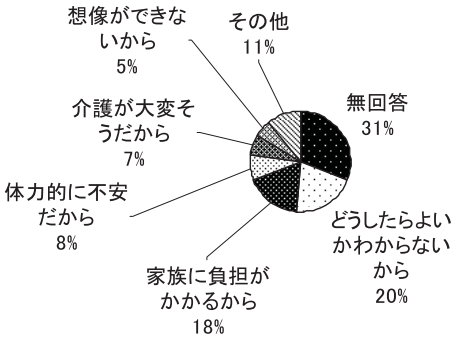

図９　自分や家族が将来高齢者になり、介護が必要な状態になることに不安を感じる理由

質問５．「自分が高齢者になり介護が必要な状態になった場合は，在宅介護を希望するか」

図10が示すように，「はい」13人（男８人，女５人），「いいえ」24人（男12人，女12人），「わからない」66人（男37人，女29人）となった。「わからない」が過半数を占めたが，在宅介護に関してはまだわからないと感じている人がかなりいるようだ。男女別に見ても，その傾向は変わらなかった。

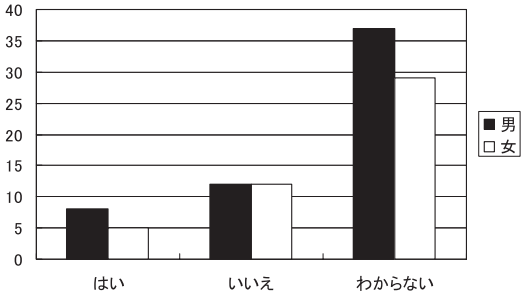

図10　「自分が高齢者になり介護が必要な状態になった場合は、在宅介護を希望するか」に対する回答数

在宅介護を希望する理由は，図11のように，「家族に迷惑をかけたくないから」30%（４人），「自分の家が安心できるから」31%（４人），「無回答」23%（３人），「お金がかかるから」８%（１人），「介護施設が嫌だから」８%（１人）であった。

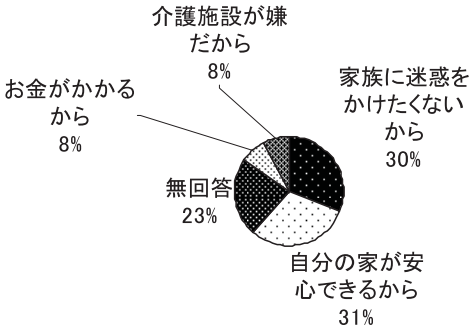

図11　在宅介護を希望する理由

在宅介護を希望しない理由は，図12のように，「家族に迷惑をかけたくないから」53%（12人），「無回答」17%（４人），「そこまでして生きたくない」13%（３人），「その他」17%（４人）であった。「その他」の内訳は，「在宅介護の辛さを知っているから」１人，「将来的に介護施設が今より整っていると思うから」１人，「介護の専門家に介護してもらいたいから」１人，「在宅介護が嫌だから」１人である。「家族に迷惑をかけたくないから」が53%と過半数を占めたが，かなりの人が自分よりも家族のことを優先して考えているようだ。

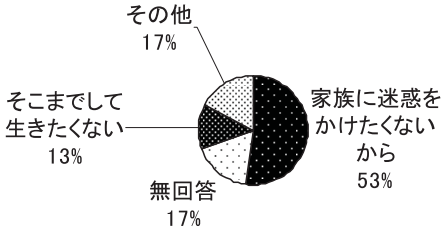

図12　在宅介護を希望しない理由

在宅介護を希望するのかどうかわからない理由は，図13のように，「その時の状況による」40%（25人），「無回答」34%（21人），「どうしたらいいのかがわからない」13%（８人），「その他」13%（８人）であった。「その他」の内訳は，「家族の迷惑を考えてしまうから」３人，「想像ができないから」２人，「自分だけでは決められないから」１人，「子どもに任せるから」１人，「将来介護が必要のない社会になっていると思うから」１人である。

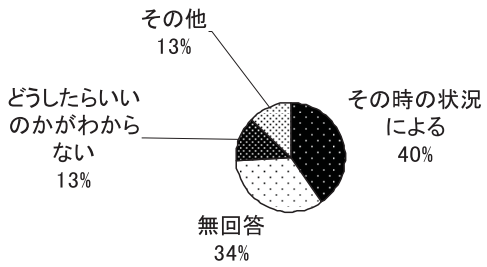

図13　在宅介護を希望するのかどうかわからない理由

考　　察

介護が嫌な人と介護が嫌ではない人はほぼ同数であり（図１），介護が嫌な人が多いのではないかとの予想とは異なった。ただ，「非常に思う」の選択が少なかったが，他の質問項目への回答（図３，図５など）では「非常に思う」はよく選択されているので，今回の調査協力者が全体的に「非常に思う」を選ばない傾向があったとは言えない。介護が嫌なのはたしかだが，心のどこかで嫌だと思ってはいけないという気持ちなど，完全に嫌であるとは言えない要因があるのではなかろうか。とすると，介護が嫌だと「思う」と回答した人も，将来介護をしなければならない状況になったときに，それを拒否するかどうかはわからない。介護は，今まで一緒に暮らしてきた身内を対象とするものである。そして，現在の社会風潮として介護の避けられなさは常識化してきている。そのようななかで，好き嫌いだけでことは進まない現実を予感していることが示されているのかもしれない。

介護が嫌だと思っている理由で一番多かったのは，「自分の時間がなくなるから」であった（図２）。介護を考えるにあたって，もちろん介護をする側のことを軽視はできない。介護によって体力的に，精神的に，そして社会的にも辛くなる。

人は自分がどのようになりたいか，どうしていきたいかを考えているものだと思うが，介護を行なわなければならない事態は，ある程度突然に目の前に現れることが多い。そこで，自分の予定は変更を余儀なくされる。この変更をそういうものだとそのまま受け入れることのできる人もあれば，戸惑い，嘆く人もいるかもしれない。そのいずれにしろ，介護を行なう人の負担の減少は大きなテーマであろうと思われる。「自分の時間がなくなるから」の選択が自分の時間を大切にしたいという風潮を反映しているとすれば，そのことへの批判よりは，介護にかかる労力や時間を減らしていく方向への努力が，社会として必要なのではないだろうか。

介護が嫌だと思っている理由で二番目に多かったのが，「大変そうだから」であった。その次に多かった「汚物等の処理をしなくてはいけないから」も含めて，介護という行為へのマイナスイメージが表明されているようだ。とくに「汚物の処理」については，他の項目への回答でもよく言及されていた。「汚さ」への耐性には個人差があるだろうが，受ける精神的ダメージは大きいだろうと思われる。その「汚さ」を極力低減できるような「道具」の改良が必要になってくるのではないだろうか。

介護を行なっている人を立派だと感じている人が多かった（図３）。とくに女性は，１人を除いて全員がそのように回答した。これは，介護に女性が多く携わっていることと，世間に伝えられる介護は辛いという情報とが併さることによって，同性としての感情移入等がなされた結果なのではないかと思われる。

介護を行なっている人を立派だと感じる理由で一番多かったのは，「介護しているという行為自体」であった。このことから，介護というものが相当に辛いものであると思われていると考えられる。この意識を変えていくのはなかなかむずかしかろうが，介護方法や利用する施設の機能などの更新の情報が，その意識の変容に影響するのではないかと思われる。

介護を行なっている人を立派だと感じる理由で二番目に多かったのは，「自分を犠牲にしているところ」であった。これは，介護が嫌な理由の「自分の時間がなくなるから」（図２）と関連しているように思う。介護をあくまでも他者のために行なうものだとすれば，個人としての時間を自分のためにいかに有意義に使うかという意識が重要視されていることの表れである。筆者の両親は勤務を終えて帰宅したあと，祖父の面倒をみ，疲れきって寝るという日々を２，３年間続けた。このような状況では，自分のための時間を有意義に使うことはできない。人が個人の時間を重要視すれば，介護に対する意識の向上は妨げられることになる。しかし，だからといって，介護意識の向上のために個人の時間を重要視させないようにすることはできない。介護と個人の時間の確保の両立を追求していかなければならない。

介護を行なっている人を立派だと思わないと回答した人は，ほとんどが男性である。そして，そのほとんどの人が「介護をすることは当然だから」とその理由を述べている（図５）。男性がこのような意見をもつのは，上述のように女性が介護を行なっていることが多い現実を前に，心の片隅で自分が介護をすることはないのではないかと思っているからではないだろうか。介護をよりよいものにしていくことと，男性の介護に対する意識の向上の必要性は，つながっているかもしれない。

介護の知識を学ぶ必要があると感じている人が多かった（図６）。そして，学ばなければならないと考えることがらで一番多かったのは，「無回答」であった（図７）。このことから，介護に対する意識は高いが，いまひとつ介護について具体的なイメージはもてていないのではないかと思われる。二番目に多いのも「介護の方法」で，漠然としている。多くの人は，介護を行なわなければならなくなったときに，介護をしながら同時に学んでいけばよいと考えているようだ。しかし，筆者の経験から，それでは手遅れだと思う。介護においては，対応が遅れると要介護者はあっという間に体も心も衰えてしまう。筆者の家族は，祖父が認知症であることを知るまでずいぶんと月日が経ってしまい，その間，適切な関わりを行なってこなかった。もっと早く認知症だと認識し，運動をさせたり，思考活動を活発にするような課題を与えたりできていれば，少しでも病気の進行を遅らせたりができたかもしれない。介護についての具体

的な知識を事前に学んでおくことが，要介護者への適切な対応につながるのだと考える。

将来，自分や家族が高齢者になり介護が必要となることに，不安を感じている人が多いようだ(図８)。不安をもつのはやむを得ないが，安心の度合いが少しずつでも増すためには，メディアが介護について希望を持てるような情報を流すことも必要であろう。介護のたいへんさの後ろに見え隠れするポジティブな要素もちゃんと拾い上げるような番組が，好ましいのではなかろうか。

将来，自分や家族が高齢者になり介護が必要となることに不安を感じる理由で，一番多かったのは「無回答」であり，二番目の「どうしたらよいかわからない」も含めると，半数以上を占める。その人たちは，自分や家族が介護の必要な状態になるというイメージを抱きにくいようだ。漠然とは不安であるが，何がどう不安かという具体像は結ばれない。しかし，具体像が想像できれば準備が可能になる。たとえば，体力的に不安ならば体力作りをすればよい。筆者の家族は介護への準備がまったくできていなかったので，すべてのことが後手にまわり，要介護者よりも先に介護者である家族のほうが精神的に参ってしまった。介護の準備を行ないやすい環境を整えていくことが必要である。

一般的には，赤の他人と一緒に暮らすよりも家族と一緒に暮らしたいと考える人は多いと思われるが，自分が高齢者になり介護が必要な状態になった場合に，在宅介護を希望するかどうかわからないと回答した人が一番多く（図10)，在宅介護を希望すると回答した人は一番少なかった。この希望するという明確な表明には，自分自身の欲求だけではなく，家族や周囲にかかる負担も考慮したうえでの判断がかかわると思われ，そのような要因が働いたことが想像される。

在宅介護を希望する理由で一番多かったのは，「家族に迷惑をかけたくないから」と「自分の家が安心できるから」であった（図11)。ここで述べられている家族にかける迷惑とは，金銭面のことを中心に指しているのだろうと思われる。また，住み慣れた家で穏やかな余生を過ごしたいという思いも含めて，家や家族との関係に関することがあげられている。

在宅介護を希望しない理由で一番多かったのも，「家族に迷惑をかけたくないから」であった（図12)。ここでの迷惑とは介護行為そのもののことを指していると考えられる。家族に自分の介護をさせ苦労をかけるよりは，介護施設に入って家族の負担を減らしたいという考えである。また，そこに自分が家族に厄介者扱いをされることを懸念する気持ちも含まれるかもしれない。

在宅介護を希望するかどうかがわからない理由で一番多かったのは，「その時の状況による」であった（図13)。つまり，自分や家族の希望よりも，その時の状況に一番適している選択肢を選びたいという気持ちの表れだと考えられる。その時の状況とは，国の制度や一般的な国民の動向のことだとみていいだろうか。だとすると，当然のことながら，そのような大きな流れが不適切な内容であれば個々の国民の動きも不適切に流れる。介護に関する法律や制度，一般的動向には注目を続けなければならない。

以上，大学生がもつ高齢者介護についての意識について，調査結果をもとに考察を行なった。大学生とひと口に言っても，家族と同居している者とそうでない者，祖父母との同居の有無，介護を身近に体験した者とそうでない者，兄弟がいるかいないか，長子かそうでないかなど，置かれた状況によって意識は影響を受けていることが考えられる。今回の調査ではそれらについて検討できず，あくまでも，一般的な意識調査にとどまった。そして，結果の処理とその結果への考察は相互関連的ではなく羅列に終わった感があり，提言めいたものも短絡性を否めない。ただ，筆者にとって，自分の介護体験から出発して少しでも研究が前進し，次のステップが見えたことは意味があったと思われる。

参考文献

横山孝子・高遠三和・中山和子（2000)「学生の意識調査結果から見た介護技術教育の重要性についての考察」『長野大学紀要』第27巻第４号

藤田昇治・高嶋一敏・佐藤三三（1999)「介護問題に関する地域住民の意識と生涯学習」『弘前大学生涯学習教育センター年報』第３号